

## 南支那の食人種について

和田 清

歴代正史の外國傳や文獻通考の四裔考などを見ると、東亞

に於ける食人種は概して南方に多く、北方には少いやうである。マルコッポロ等の所傳によると、支那や西藏にも食人の風習があり、殊に桑原博士の研究から見ると、少くとも有史以前の支那人は立派な食人種であつたやうであるが、併しそれは記録以前のことで、まだ確かなことは言へない。たゞその支那人が歴史時代の當初に於いて、今の南支那の地方に一種獨特の食人種の居たことを確言してゐる。今その事を少し考へて見よう。

先づ墨子の節葬篇を見ると、左の如くある。

楚之南有炎人國者、其親戚死、朽其肉而棄之、然後埋其

骨、乃成爲孝子。

これは「朽其肉而棄之、然後埋其骨」といふのから見ると、朝鮮や安南やその他中南支等にも時に見られる骨洗ひの風俗のやうであるが、次ぎに出て來る例から並せ考へると、その「炎人國」といふのは明かに「啖人國」の誤であつて、やはり一種の食人種なのである。即ち同じ墨子の魯問篇には左の如く見えてゐる。

楚之南有啖人之國者、橋其國之長子生、則鮮(誤解)而食之、謂之宜弟、美則以遺其君、君則賞其父、豈不惡俗哉。

兩者は少し違ふやうでもあるが、併し墨子などは能く同じ事を繰返して説いてゐるのであるから、同じ楚南の啖人國といふのは決して別物ではなからう。これで見ると、この國の食人肉は特に長男を食べて次男以下の幸福を祈るのである。西洋人の研究によると、今日でもオーストラリヤの土人の中には、母親が長子を食べると、その清新の氣が乗り移つて、次子以下が殊に壯強になるといふ信仰があるさうであるから、これはそれと同じ意味の迷信から出た惡習であらう。

ところがその同じ事が後漢書の南蠻傳に出て來る。後漢書

の南蠻傳には南蠻のことを説いて、「禮記稱南方曰蠻、雕題交趾、其俗男女同川而浴、故曰交趾」と曰つた續きに直に續けて、

其西有噉人國、生首子、輒解而食之、謂之宜弟、味旨則以遺其君、君喜而賞其父、取妻美則讓其兄、今烏潯人是也。

とある。これが後漢書の噉人國に關する全文であるから、匆卒に讀むと、即ち後漢の時の事のやうに思はれるが、能く讀んで見ると、さうではない。これは明かに禮記やその他古傳を引いて昔の事を言つたのであつて、その文言から見ると、確に前に掲げた墨子などの言ふところと同じ事なのである。後漢書の作者の附加したところは、それが「今の烏潯人は是れなり」といふことだけである。

後漢書の作者は不敏にしてたゞさう言つただけで、今の烏潯人が果してどんなものか一切説明しなかつたが、今の後漢書にはそこに唐の章懷太子李賢の補注があつて、左の如く見えてゐる。

萬震南州異物志曰、烏潯地名也、在廣州之南、交州之北、恒出道間、伺候行旅、輒出擊之、利得人食之、不貪其財貨、並以其肉爲肴菹、又取其髑髏、破之以飲酒、以人掌趾爲珍異、以食老也。

南州異物志については隋書の經籍志に「南州異物志一卷、吳丹陽太守萬震撰」と見えてゐるから、烏潯人は後漢から三國にかけて、當時の廣州即ち今の兩廣の南で、交州即ち東京地方の北方に當る所にゐた、烈しい食人種だつたのである。

否、烏潯蠻のことは後漢書にも他の條には頻繁と見えてゐるのであつて、南蠻傳の末にもその叛服のことが見えてゐるが、同じことが例へば靈帝紀建寧三年(170 A.D.)九月の條には、

鬱林烏潯民相率內屬。

とあり、そこに注して「烏潯南方夷號也、廣州記曰、其俗食人、以鼻飲水、口中進噉如故」と見え、また同じく光和元年(178 A.D.)春正月の條には、

合浦・交趾烏潯蠻叛、招引九真・日南民、攻沒郡縣。

とあり、更にまた同四年(181 A.D.)夏四月の條には、

交趾刺史朱儁討交趾・合浦烏潯蠻破之。

とあり、更に同書朱儁傳等にもその事を詳に記してゐる。さうしてこれを綜合して最も要領よく纏めたのが資治通鑑の記事である。左に之を鈔録して見よう。

〔建寧三年〕冬、鬱林太守谷永以恩信招降烏潯人十餘萬、皆內屬受冠帶、開置七縣。通鑑五六  
漢紀四八

光和元年春正月、合浦・交趾烏潯蠻反、招引九真・日南民、攻浚郡縣。通鑑五七  
漢紀四九

〔光和四年夏四月〕、交趾烏潯蠻久爲亂、牧守不能禁、交趾人梁龍等復反、攻破郡縣、詔拜蘭陵令會稽朱儁爲交趾刺史、擊斬梁龍、降者數萬人、旬月盡定、以功封都亭侯。通鑑五八  
漢紀五〇

これで見ると、烏潯蠻は鬱林・合浦・交趾三郡の境にゐて、後漢末にはほど蕩平されてゐたのである。

通鑑に附した元の胡三省の注によると、前掲の萬震の南州異物志や章懷太子の注を引いた後につけて、「劉昫曰、貴州

鬱平縣、漢鬱林廣鬱縣地、古西甌駱越所居、谷永招降烏潯、開置七縣、卽此也。杜佑曰、烏潯地在今南海郡之西南、安南府北朔寧郡管」と見えてゐる。その「劉昫曰」といふのは卽ち舊唐書地理志邕管十州の條下に、

鬱平、漢廣鬱縣地、屬鬱林郡、古西甌駱越所居、後漢谷永爲鬱林太守、降烏潯人十萬、開七縣、卽此也、烏潯之俗、男女同川而浴、生首子食之、云宜弟、娶妻美讓兄、

相習以鼻飲、秦平天下、始招慰之、置桂林郡、漢改爲鬱林郡、地在廣州西南安南府之地、邕州所管郡縣是也。

と見えてゐるものゝ省略である。「杜佑曰」といふのも必ず通典の語句と思ふが、今その出所を検出し得ない。いづれにしても、之を安南府の地といふのは少し杜撰であつて、漢代の廣鬱縣は今の貴縣の方面といふことであるが、唐代の鬱平縣は殆ど今の廣西の興業縣の附近である。宋の樂史の太平寰宇記卷六六嶺南道○貴州の條には、この舊唐書地理志の説をそのまゝ承けて、

鬱平縣、漢廣鬱地、屬鬱林郡、古西甌駱越所居、後漢谷

永爲鬱林太守、降烏潯人十萬、開置七縣、此鬱林縣也、  
在鬱江之西、……

と言ひ、また烏潯夷のことを説いて、

烏潯夷、異物志云、烏潯南蠻之別名也、巢居鼻飲、射翠  
取毛、割蚌求珠爲業、無親戚重寶、貨賣子以接衣食、若  
有賓客、易子而烹之。

とあり、別に同じく横州風俗の條にも「三梁故縣、烏潯所巢」  
とある。宋代の貴州は今の廣西貴縣の邊であつて、横州はそ  
の西南の横縣の附近である。

併しこれでも未だ烏潯の位置は適確でないが、清の顧祖禹  
の讀史方輿紀要卷一〇によると、その廣西横州の烏潯山といふ  
ものゝことを述べて、

烏潯山、州東六十里、昔烏潯蠻所居之地、亦曰烏浦、後  
漢建興（誤）三年、鬱林太守谷永招降烏浦人十餘萬、開置  
七縣、熹平末、合浦交阯烏浦蠻反、光和四年、刺史朱雋  
破之、蓋是時烏潯於諸蠻種爲最盛也、杜佑曰、烏潯在南  
海之西南、安南府北、屬朗寧郡界、劉昫曰、今貴州鬱平

縣、漢鬱林郡廣鬱縣地、古西甌駱越所居、谷永招降烏潯  
即此地也、今山與貴縣界相近、亦謂之烏蠻山、郡志、山  
本名烏巖、南漢主名巖、因易爲蠻、非是、山下有烏蠻  
灘。

とあり、清朝の南寧府志卷四や商務印書館の中國古今地名大  
辭典及び辭源等にはその説が要約して載せてある。烏蠻山の  
ことは既に宋初の太平寰宇記に「烏蠻山在（横）州東八十里、  
烏蠻所居」とあり、清の一統志卷三にも「烏蠻山、在横州東  
八十里、寰宇記烏蠻所居、故名、舊志在今州東六十里、江北  
古江口下有烏蠻灘、其隔江對峙者爲青旗山」と見え、その烏  
蠻灘は更に有名な所である。これによれば、烏潯蠻の住地は  
今の横縣の東方で、ほど確指すべきやうである。

なほ明の鄭露の赤雅上にも「烏蠻國」と題して左の如くあ  
り、

烏蠻古損子產國、即烏潯蠻也、生首子、輒解而食之、曰  
宜弟、味旨則獻其君、君喜之、而賞其婦、妻美則讓其  
兄、兄樂之而宜其弟。其中有灘焉、即今之烏蠻灘也、漢

建武中、國除、蠻遂散處山谷、其風不改。

損子産國といふのは首子を殺すから言つたのであらうし、「漢建武中、國除」とか、「兄樂之而宜其弟」とかいふのは凡べてよい加減の説明のやうである。たゞこゝにも烏潯蠻が烏蠻灘の地にあることを確言してゐる。

併しなほ一考して見るに、右の鄭露の言には勿論、顧祖禹の叙述の中にも少からぬ誤解があり、曖昧なところが多く、烏潯山の名は寧ろ烏蠻山から導かれたやうで、俄に全幅の信用を措き難い。第一に初め不明だつた所が後になつて段々に明瞭になつて來ることからして信じ難い。後漢の谷永が降した烏潯蠻は十餘萬もあつて、七縣を開置したといふのであるから、そんな狭い所ではない。若しこの七縣が後まで残つてゐたら、それによつて烏潯蠻の本據も推定出来るわけだが、この七縣はその後忽ち廢止されたと見えて、漢書地理志と後漢書郡國志、晉書地理志などを比較して見ても、それらしいものは絶えて見えない。けれども烏潯蠻の住地が鬱林・合浦・交阯三郡の境上にあつたことは確であるから、それが今の横

縣の東方では少し東に過ぎる。吳の萬震の南州異物志に「廣州之南交州之北」とあり、そこが交廣二州往來の衝に當つてゐたやうに書いてあるところから見ても、烏潯の本據はも少し西方へ寄つた方が適當なやうである。

今試みに漢書地理志に見える鬱林郡の十二縣、合浦郡の五縣と、後漢書郡國志に見える鬱林郡の十一城、合浦郡の五城とを比較して見ると、大體は同じであつて、たゞ前漢の鬱林郡の雍雞縣(今の左江)が缺けてゐるだけである。之を通説に従つて今日の地名に比定すれば、鬱林郡の首治布山縣は今の廣西横縣の東、安廣縣は即ち横縣治、阿林縣は桂平縣の東、廣鬱縣は貴縣、中溜縣は武宣縣の西南、潭中縣は馬平縣の東南、臨塵縣は邕寧縣の西、定周縣は宜山縣の西北、增食縣は賓陽縣の東北、領方縣は賓陽縣の西、桂林縣は今の桂林に當り、合浦郡の首治徐聞は今の廣東の海康、高涼は陽江縣の北、合浦は合浦縣の東北、臨允即ち臨元は新興縣の南、朱盧即ち朱崖は海南島瓊山縣の東南に當る。更に之を今の地圖に擬て、辿つて見ると、廣西では大體桂林から馬平(柳州)・賓

陽を過ぎ、南は邕寧（南寧）に抵る一線を境にして、それより東方は拓けてゐるが、それより以西は概して未開の蠻地である。これは天然の地勢にもよること、漢代に限らず、後まで斯ういふ形勢であつた。その中、横縣、貴縣の邊は漢代の鬱林郡の中心地域で、鬱江の中流域に當り、割合早くから開けてゐた所である。漢代の嶺南は叢林縦横の地域で、形勢も今とは餘程違ふとは思ふが、それにしても此の最も開けた處に烏蠻山があり、それが食人種の中心であつたとは少々受取り難い。さういふ事情から考へても、烏蠻山が即ち烏潯山で、そこが烏潯蠻の本據であつたとは信じられない話である。

況して宋の太平御覽卷七 八六に引いた裴淵の廣州記によれば、  
晉興有烏潯人、以鼻飲水、口中進噉如故。

とあり、烏潯人が晉の晉興郡の方面にゐたことはほど疑ないのである。廣州記のことは隋書經籍志にも見えず、裴淵が何代の人かも審かでないが、晉興といふのは晋書地理志にも「元帝分鬱林立晉興郡」とある所で、即ち鬱林郡の西で、今

の邕寧縣以西の方面に外ならないから、裴淵も恐らく晉時の人で、當時烏潯人がこの方面にゐたことは確かであらう。果してさうなら、漢時の烏潯人もやはりこの方面にゐたので、後漢の谷永は之を平けてこゝに七縣を開置したのであらう。その地は之を鬱林・合浦・交阯三郡の境上といふところから見て、今の左江の流域方面でなければならぬ。そこは前漢が嘗て象郡を設け、後に雍羅縣を置いたが、やがて放棄した所であつて、谷永の七縣も忽ち廢棄せられたから、後に解らなくなつたのであらう。かう考へれば、凡べて支障なく解釋出来るが、之を横縣の東の烏蠻山としては何とも理解し難いのである。

さて後漢時の烏潯蠻は今の廣西の左江の方面にゐたものと  
して、それでは墨子は果して戰國の初めに斯かる僻遠な地方まで知つてゐたのであらうか。戰國の時、支那人が既に湖南の南邊を究めて蒼梧及び九疑山等のことを知つてゐたことは確かであるが、否、坪井九馬三博士の推論にして誤なければ、莊子の逍遙遊篇の大鵬の叙述は南支那海の龍卷の形容だ

といふから、當時或は南支那海まで知つてゐたかも知れないが、<sup>(5)</sup>それにしても、それはいづれ南北を通ずる大道によつたもので、左江流域の如き僻遠の地を知つてゐた筈がない。それでは墨子の啖人國は果して何處を指したものであらうか。自分の考によれば、これは實は烏滸蠻とは全く違ふものなのである。

それを論ずる前に、烏滸蠻のことを少し詳しく考へて見よう。太平御覽卷七八六四夷部七南蠻一の條には、特に烏滸蠻に關する史料を網羅し、最初に後漢書の記事を掲げた次に「南州異物志曰」として左の如くあり、

交廣之界地名曰烏滸烏滸、東界在廣州之南、交州之北、恒出道間、伺候二州行旅、有單迥單迥擊者、輒出擊之、利得人食之、不食其財貨也。地有棘竹、厚十餘寸、破以作弓、長四尺餘、名狐弩、削竹爲矢、以銅爲鏃、長八寸、以射急疾不凡用也。地有毒藥、以傳矢金、入則撻皮、視未見瘡、顧盼之間、肌肉便皆壞爛、須臾而死、尋問此藥云、取虫諸有毒螫者、合着管中、曝之既爛、因取其汁、日煎

南支那の食人種について 和田

之、如射肉在其內地則裂、外則不復裂也。烏滸人便以肉爲殺俎、又取其鬮、破之以飲酒也、其伺候行人、小有失輩、出射之、若人無救者、便止以火燔燻食之、若人有伴相救、不容得食、力不能盡擔去者、便斷取手足以去、尤以人手足掌蹠爲珍異、以飴長老、出得人、歸家合聚隣里、懸死人中、當四面向坐、擊銅鼓、歌舞飲酒、稍就割食之、春月方田、尤好出索人、貪得之、以祭田神也。更にまた單に「異物志曰」として次ぎの如くある。

烏滸取翠羽採珠爲產、又能織斑布、可以爲帷幔、族類同姓有爲人所殺、則居處伺殺主、不問是與非、遇人便殺、以爲肉食也。

前の南州異物志は即ち萬震の南州異物志の原文で、之を詳にしたものに過ぎないが、後の異物志は全く之と違ふやうであるから、恐らくは名高い後漢の楊孚の異物志の斷簡でもあつてあらう。いづれにしても、兩者が俱に烏滸の風俗を叙してゐることに疑ひはない。

今之を考へて見るに、異物志の記述は相當詳細を盡してゐ

るが、烏潯人の食人肉は他人を襲撃して之を嗜食するのであつて、決して己が子を食するのではない。同じ食人肉でも、他人なら之を食する外食人肉(Exo-cannibalism)と身内であれば食しない内食人肉(Endo-cannibalism)とが根本的に違ふことは世に知られた事實である。マスペロ氏の報告するところによると、今の佛印山地のジャライ族は次子以下の贖をするために長子を埋殺するといふ。今日では之を食するのではないが、その本義から言へば昔はやはり食べたかも知れないのであつて、もしさうなら楚南の啖人國と全く同じ風習である。佛印の山地と戦國時の楚南とは餘りに隔たつてゐるから、兩者の間に如何の關係があつたかは之を審かにすることとは出来ないが、少くとも兩者の風俗に共通のものゝあることだけは、認めざるを得ないであらう。之に反して烏潯人は道行く旅人を襲殺して之を嗜食するのであつて、その點では却つて今のシャン地方のワー族などと撰ぶところはなない。尤も内外無差別に食ふ食人肉の惡習もないことはなく、内食人肉をやめて外食人肉だけに變じ、後には首狩をするだけで食

人肉はしなくなるといふやうな變化もないことはないが、併しさういふことは希な例であつて、こゝに見ゆる啖人國と烏潯人の食人肉は兩者が截然と區別してある。時代からして前者は戦國時代のことであり、後者は後漢三國時のことである。これが私が楚南の啖人國と烏潯人とを全然別物と考へる所以である。後漢書の作者や之を承けた舊唐書・宋書の著者等は皆之を混同してゐるが、それは全く食人肉の眞義を明白に理解しなかつた爲めの誤からである。

話は前に戻り、烏潯蠻の住地は今の廣西の左江の流域方面だとして、之と違ふ楚南の啖人國は果して何處にあつたであらうか。戦國の時今の江西の方面は未だ開けてゐなかつたので、楚南といふのは必ず湖南の南邊に近い廣西の地方でなければならぬ。さうとすれば、所謂啖人國は或は廣西の中央で、それこそ後の鬱林郡の中心地方、今の貴縣横縣の方面にもあつたものかも知れぬ。それが次ぎの漢代には既に開化されてしまつたので、更にその西隣の烏潯人だけが残つて知られたのであらう。確證なきところに強ひて推測した臆斷で



はあるが、私は啖人國と烏滸人との關係をほど斯くの如きものではなからうかと思ふ。いづれにしても、今の支那人が食人肉の慣習を持つてゐた太古のことはいざ知らず、歴史の漸く明かになる頃、南支那の地方には未だ幾多の食人種が残つてゐて、それが相並んで榮えてゐたことは想像してもほど差支へないであらう。かう考ふれば、啖人國は今の猿の住地に近く、烏滸蠻は獐の住地に近いが、併し果してこれらが今の何族に當るかは到底俄に決定し難い問題である。

最後になほ鼻飲の風習について一言觸れて置かう。太平御覽には前述の如く、烏滸について後漢書・南州異物志・異物志の記事を列擧した後に、最後に裴淵廣州記を引いて専ら鼻飲の奇習について傳へてゐる。その他この鼻飲のことは頗る有名であつたと見え、色々の本に所傳がある。例へば宋の朱輔の溪蠻叢笑には鼻飲と題して左の如くあり、

犴狔、飲不以口而以鼻、名曰鼻飲。

明の鄙露の赤雅には鼻夷と題して左の如くある。

鼻夷獠族、鼻如垂鉤、隅目好殺、深明水脉、采猿臂鱷牙

爲遂、吹爲龍聲、間出市鹽、與之、鼻飲輒盡。

犴狔は廣西湖南貴州に擴がる蠻族の一種で、一に犴狔とも言つたといふから、後者の獠族と同じものを指したであらう。

「鼻如垂鉤」は猶太鼻を想起させるが、實は鼻飲から推測した小説に過ぎまい。一體にこれは鹽を鼻から飲むことゝ言ひ、傳説的色彩が頗る強い。之に反して、鼻飲のことについて最も着實な記事と思はれるものは、宋の周去非の嶺外代答卷一の中に見ゆる左の一丈である。

邕州溪洞及欽州邨落、俗多鼻飲、鼻飲之法、以瓢盛少水、置鹽及山薑汁數滴於水中、瓢則有竅、施小管如瓶嘴、挿諸鼻中、導水升腦、循腦而下入喉、富者以銀爲之、次以錫、次陶器、次瓢、飲時、必口嚙魚酢一片、然後水安流入鼻、不與氣相激、既飲必噫氣、以爲涼腦快膈、莫若此也、止可飲水、謂飲酒者非也、謂以手掬水吸飲、亦非也、史稱越人相習以鼻飲、得非此乎。

これで見ると、鼻飲は一種の嗜好であつて、今日の喫煙の如きものである。いづれにしても、邕州の溪洞や欽州の村落で

行はれるといふのであるから、今の南寧・欽縣の方面であつて、この風俗が若し廣州記に見える昔の烏潯蠻の風習を傳へてゐるものだとすると、この點からも烏潯蠻の住地が元來この方面だつたことが立證せられるやうである。

追記

明の黃福の「奉使安南水程日記」は永樂四年に南京を發した黃福が揚子江を溯つて湘水に入り、桂水を下つて鬱江に入り、更に左江を溯つて安南に達した、南京・安南間の水程の紀行であるが、その中、閏七月十四日の條は、丁度廣西の貴縣・橫州間の旅程で、左の如くある。

十四日、辰時至香江驛、驛隸貴縣、程八十里。申時至烏蠻驛、驛隸橫州、程八十里。香江之來烏蠻、灘水險惡、有十里餘、溯舟頗難、名曰烏蠻灘。

これで見ると、烏蠻灘は貴縣の西南百六十支里で、橫州の東に當り、その位置甚だ明かである。烏潯蠻がこの烏蠻山にあるといふ話は、その名稱の類似から起つた傳説に相違ない。烏潯蠻は廣交二州の境界にわたるのであるから、もつと西方の

左江の流域で、それだから二州往來の行旅を伺つて、これを襲つたのであらう。

註

- (1) Yule and Cordier, *The Book of Ser Marco Polo*, I, pp. 301, 312-3; II, 225, 228, 233-4, 237, 311-2.
- (2) 桑原博士「支那人間に於ける食人肉の慣習」東洋文明史論叢, pp. 136-217.
- (3) F. Westermarck, *The Origin and Development of the Moral Ideas*, Vol. II, p. 552.
- (4) 蒼梧のことは始めて戰國策に見え、九疑山のことは史記秦始皇本紀に見える。その詳細については別に論ずる機會があらう。
- (5) 坪井博士「南洋諸島に關する支那最古の史料」歴史地理九、一。
- (6) G. Maspero, *Un empire colonial français l'Indochine*, Paris, 1929, Tome I, p. 254.